

太宰府天満宮の伝統行事

菅原道真（845-903）は伝説的な学者でも詩人でも政治家でもあり、太宰府天満宮に学問・文化・芸術の神様である天神として祀られている。年間を通して、太宰府天満宮では天神様をお祀りし、天神様が親しんだ文化を通じて感謝を伝えるため、100 を越える祭礼が行われている。

道真公は、平安時代（794-1185）を代表するような様々な芸術的・文化的な活動に意欲的に取り組んだ人物であった。早春の梅を愛で、歌を詠み、七夕を祝った。こうした古代の取り組みに敬意を捧げたものとして、太宰府天満宮の 3 つの主要な祭礼である春の曲水宴、夏の七夕祭、秋の残菊宴がある。

曲水宴は、鮮やかに色付いた梅の下で歌を作って詠む行事であり、太宰府では 1100 年近く続いている。かつては京都御所で行われていた宮中行事で、3月の第一日曜日に平安時代の装束に身を包んだ参加者が神社の庭に集まって行事が行われる。伝統的な舞踊が披露された後、上流から盃が自分のところに流れてくる前に和歌を作って短冊に書く催しのため、歌詠み達は庭園の小川に沿って並ぶ。

七夕は毎年 7 月 7 日に日本全国で祝われる祭礼である。中国から伝わった伝承で、織姫と彦星は恋に落ちたが強制的に引き離された。その後、2人は7月7日にだけ会うことを許された。道真は

この伝承に通じており、詩にしたもある。太宰府天満宮では願い事を書いた何千枚もの色とりどりの短冊が枝に吊るされ、浴衣姿で音楽や踊りを楽しむ祭礼が催される。

11月下旬に行われる「残菊宴」も、かつて宮中で行われていた儀式である。菊の花を愛した道真公を偲んで大宰府に伝わった。参加者は長寿の象徴である菊の花を入れたお酒を飲んでから、墨書の儀に参加する。色とりどりの菊の鉢植えと巧みに描かれた書道作品は、その後もお供え物及びさらなる発展への祈願として天神様に捧げられる。

その他の太宰府天満宮の祭礼や行事でも、例えば梅の枝を手に巫女が舞う2月下旬の梅花祭（ばいかさい）など、学問や文化に重きを置いたものが多い。また、10月中旬には道真公が平安時代最難関の試験に合格した日に、受験生が学業成就を祈願する「特例合格祈願大祭」というものもある。